

酷暑の夏に思う、「風物詩」、「風流」そして「風情」ということ

校長 狩野博臣

「寝かへれハ 汗のひつつく 暑さ哉」(正岡子規)

連日暑い日が続いておりますが、皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

7月21日・22日に口之津マリンフェスタが開催されました。海外の交流の窓口として栄えた口之津港で、毎年、海の日に合わせて行われる一大イベントです。私もオープニングイベントの餅まきに参加させていただきました。以前から行われた花火大会がさらに地域振興に一役買うようにという目的で、口之津町観光協会様が主催となり平成8年に「第1回マリンフェスタ in くちのつ」が開催されたとのこと。今年で23回目となり、関係の皆様方に敬意と謝意を表したいと存じます。今年は3500発もの花火が打ち上げられ、多くの皆様が真夏の夜のひと時を楽しまれたことでしょう。夏といえば花火。まさに夏の風物詩の代表格です。

風物詩といえば、子どもの頃、母が大きな金ダライに入れた水を日中の日差しで温めくれ、日が陰る頃に庭で行水をしたのを思い出します。生徒たちに行水と言っても、「？」でしょうか。時代の趨勢とはいえ、子供の頃の夏の風物詩が姿を消していくことは寂しいものです。風鈴のチリンチリンという音に涼を感じるのも今は昔。今は窓を閉め切った冷房でしょうから風鈴の活躍の場はなくなりつつあります。打ち水は焼石に水に。蚊取り線香はペープマットに。うちわ片手に浴衣で夕涼みをする姿もなかなかお目にかかれません。

暑さや寒さの対処法や行事など、季節ごとの風物詩は日本人独特の感性ともいえるべき「風流心」から生まれてきたのかもしれませんが。「風流」と口にただけで、何か忙しい心にゆとりが生まれる感じがします。そもそも「風流」とは何でしょうか。ある辞書の定義の一つに「利害打算を超えた世界の事柄に心の交流や安堵が具現し、その間だけ、煩わしい俗世間的交渉から解放されて余裕を楽しむこと。」とあります。

同じ「風」を使い「風情」ということばもあります。辞書で調べると「その場の情景から感じられる、何とも言えない風流な感じ。」とあります。この「何とも言えない」というのが何とも言えませんね。この何ともことばでは言い表せないけれども、何かいいという感覚・・・分かります。こういう「風流」とか「風情」といった何かうまくことばでは説明できないけれども、何か落ち着くとか、癒されるといった感覚を古来から日本人は持ち続け、受け継いできたのでしょう。「風流」や「風情」は日本の生活風土の中で、日本人の感性や感覚から生まれたことばでしょうから、外国の方々に説明するのは難しいものです。あえて英語に訳すなら、それぞれ“elegance”と“taste”でしょうが、日本語が持つニュアンスとは違います。

日本人は古来より、恵まれた自然環境の中で季節の移ろいを繊細にとらえてきました。春夏秋冬の四季をさらに細かく節に分けた二十四節気もその一つです。8月7日は秋の気配が感じられる「立秋」、8月23日は暑さが収まる「処暑」です。その微妙な移ろいを感じることは難しいかもしれませんが、日常のちょっとしたことに「風流」や「風情」を感じられたら素敵だと思います。今月も皆様にとりまして健やかでよき月となりますように。「涼風の 曲がりくねって 来りけり」(小林一茶)